

「石桜新聞」の復刊を願って

近津 義一（新8回生）

「石桜新聞」の姿が見えなくなつてからす

でに久しい。出版委員会が健在であり、会誌「石桜」も継続発刊されているのに、なぜ新

聞はないのであろうか？ 昔かかわつた者の

ひとりとして、一日も早い復刊を願ひ当時の

状況をふり返つて見たい。

石桜新聞は二五年三月、二二年頃からの旺盛な意欲を結集しての創刊であつたが、その後、日たらずして文芸を好む少数の学生による新聞作りが定着。部員不足が悩みではあつたものの、少数精鋭による編集が伝統になりつつあつた。

新聞作成の第一歩は紙面の大きさの選択である。創刊号はタブロイド版四頁であつたが

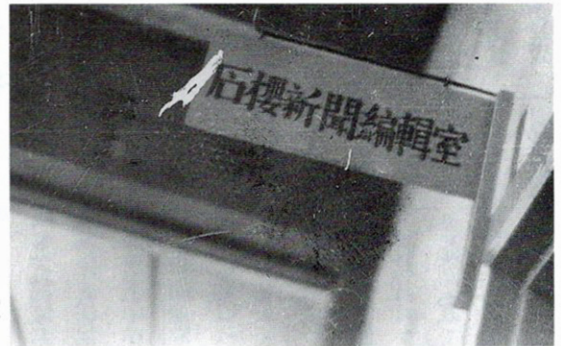
二六、七年にはブランケット版（普通新聞の大きさ）二頁が多く、二八年以降は項目別の割り付けや増頁が容易であることから、タブロイド版（普通新聞の半分の大きさ）に定着していった。

私は後日、そのブランケット版の中に福島市で印刷したものを発見した。当時、印刷は福島が安いとの情報もあったので、遠路も気にせず遠征したものだと思われる。大きな驚きを感じたが、このことは新聞発刊のための研究と経費軽減に努力したことがうかがわれ、ここにも石桜精神が発揮されていた。

私が最初に出版委員会―新聞部に顔をだしたのは高一、二八年の春であった。温和で文学志向の委員長藤村圭秀氏（新6回生）が静かな雰囲気の中で頑張っていた。市内高校新聞連盟を結成させ、後の岩手県高校新聞連盟の礎を築いた人。

当初何もすることのなかった私が、最初に目にしたのが他校新聞である。当時一五〇校を越える各地の高校と新聞交換をしており、居ながらにして他校の情報や全国高校の動向が読み取れ、外の空気を少しでも受け取りたいと思っていた私にとって、これは宝の山であった。

二九年の委員長は吉田栄一氏（新7回生）
静かな人であったが、新たにできた第四応援



初期の校内新聞編集室
(昭和22年)

歌の作詞者であり、後日の文化祭で「さんまの詩」を朗読、一挙に有名になった文人。この年、顧問の及川篤夫先生の指導で高一の学生が多数入部、部室は狭さを感じるほどの活況となり、新聞作成は順調に推移した。

こんな時、大事件が発生した。応援団による集団暴行である。前後三回の応援歌練習時に五〇名を越える被害者がでた。一部に報復



石桜文化祭出版委員会（昭和30年）

の情報もあったが、全校的にはおもしろい雰囲気の中で静寂であった。この被害者の中には筆者も含まれており、大々的なキャンペーンを考えたものの対外反響のこともあり、どうするか、結論を得ないうちに夏休みに入った。この件はその後、学校側から応援団の解散が発表され一件落着となった。

三〇年、ついに六年間の最後の年を迎え、

これまでの経過から責任者を引き受けることになった。

当初、平静な年と予想していたが、創立以来の快拳となった野球部の甲子園出場や大選手団を送った名古屋市での高体連などで取材記事に困ることもなく、当初の予定どおりの発刊を重ね、一方、部内ではミニ討論会なども活発化し後継者も充分であった。

ここで石桜新聞の隠れた功労者を紹介したい。先輩の努力で校内一の部室を確保していたが、それでも問題があった。それは電灯である。新聞の発刊回数増加にともない夜の編集が多くなり、明りを求める要求が日々高

まっていた。

そんな五月のある日、電気の来ている隣りの合同教室の天井裏に入り込んだ者がいる。それは藤原一広氏（新9回生）だった。彼はその後まもなく自分で材料を準備し、待望の明りを点してくれた。喜んだことは言うまでもないが、無許可であり安全にも問題があった。許可を求める一方その間、付けたり隠したり大わらわとなった。まもなく承認され正規の工事が行われたが、早期点灯の契機を作ってくれた功労者であることにはかわりはない。

当時、他校新聞の発行回数を見ると一、二回が大半で、作っても予算がなく発刊できな

かった。石桜新聞は前年続き五、六回でも可能であった。このことは学校側がその使命を十分に評価してくれたことの表れであり、幸いだったと言える。また顧問の先生には時間を無視して指導いただき、とくに西在家寛先生にはお世話になった。この紙上を借りて感謝申し上げる次第である。

最後に、この執筆に当たり在京の新聞関係者である吉田栄一（新7回生）、高橋純一（新9回生）、千葉勝之（新10回生）の各氏に連絡をとった。各々第一線で元気に活躍中であることを付け加えておきたい。